

現したという。大師は神靈となして、梓衝神社の御身体として祭った。鉾が出た所を「下の沖塚」と呼んでいる。

人皇六十代醍醐天皇の延喜年間には、四十余郷八十余村の総鎮守となった。後、当地を「鉾衝」と書くようになったところ、神事祭礼の折、真剣を持つての争いが多く起こり、神前を穢すことがたびたびあった。

慶長元丙申年領主榊原忠次公の時代に、延喜式に記載する所の文字「梓衝」に復したところ、神事祭礼には、争いが納まり太平になった。元禄三庚午年六月一日、鹿島大明神を梓衝神社に合祀した。

さらに元文四〇末年神主室田薩摩守定信、長楽寺第十九代别当祐鏡、庄屋安藤孫右衛門栄信、上京して大神宮の神号を賜わった。十月八日帰国して、銭神守に假屋を建て、お迎えすることにし、十月二十七日、八、九日の三日間、遷宮式を行つて、鹿島大神宮の名称で呼ぶようになった。明治の廢仏の折、神仏分離によつて、梓衝神社の名称に復した。

しかし、今でも鹿島様と呼ばれている。旧白河領なので、代々の領主の信仰厚く、たびたび修理修覆して、現在のような堂宇となった。馬場先の石橋は、夜泣き子、又疫病にかかったとき、この橋の下を三度くぐると治るといわれ、その習慣があつた。

またこの神社に伝わる太鼓獅子は、閏年に出され、奈良朝時代から伝承されたといわれる。伎楽風の獅子神楽で、祭礼の行事は、本殿から二百メートル下の参道に設けられる（昔は、古町の姥神様の所に御假舎が設けられたといわれる）御假舎に御神輿を安置して、宮司の發渡祭の祝詞の儀式により開始す